

『森林の少年』(五)

D・H・ロレンス & M・L・スキナー 著
山田 晶子 訳

第三章(続)

2

「ここには警官がいるんでしょう？」

「そうだよ。大勢の騎馬警官がいるよ。有能なんだ。彼等は必要とされているんだ。西オーストラリアは、黒人や白人の年
老いた囚人でいっぱいなんだ。ここで生まれた白人は『搜索者』
と呼ばれている。砂を搜索する者たちだ。彼等は互いから守ら
れることを願っている。そして民間と軍隊の両方から半分ずつ
給料をもらっている役人がある。また、ブッシュ中に散らばつ
た僧侶がいる——」

『互いから守られる必要があるが、馬車を強奪する者は誰も
いない』と彼は言っている、とジャックは冷笑的に思った。

ブッシュが野生の雑木林と入れ代わっていた。しかしすぐに
開けた場所へ出た。小さな木製の家、並んで植えられた果樹、
彼方に見える牧場など。次にもつと平坦な牧場、耕された農地
そしてあちらこちらには掘建て小屋が現われた。子供たちが周
囲で遊び、めんどりもいた。それから規則的に並んだ農家があ
り、前にも後ろにもベランダが付いていた。つる草が伸びて、
周りには垣根があった。

「土が赤い！」

と、ジャックは叫んだ。

「粘土だ！ 粘土だ！ オールバーニーへ着くまで、ところ
どころを除いては、もう砂地はない。ここはバラの花が咲くギ
ルドフォードだよ。」

二人は、白い手すりが付いている狭い木製の橋をカタカタと
鳴らして渡り、馬が交換されるはずの木製の宿屋まで行った。

ジャックが道へ降りると、ジョージさんとエリスさんが眠そうな顔をして現われ、一言も交わさないうで通り過ぎ、「バー」と書かれた場所へ入って行った。

「少し歩いてみます。途中で拾って下さい。」
と、ジャックは言った。

しかしその瞬間に、乗り合い馬車の後ろから羊毛のように真っ白な頭が覗いて叫んだ。

「グレイさん！ グレイさん！ 立派な猫が駄目になってしまったよ。」

馬車の馭者は、ジャックと一緒に丸まるとした腕が指し示している所へ行った。そして踏みしだかれた草のそばに猫が横たわっているのを見た。それは完全に死んでいた。二人はそれを見ていた。グレイは、立派な皮だ、無駄にするのは本当にもつたいない、手後れになる前に誰かがなめてくれないかなあ、乗客がオールバーニーへ着くまでは反対するので自分は馬車の中へこれを持ち込めない、天候は少し涼しくなってきたけれど、と言った。

ジャックは笑ってオーバーコート脱ぎ捨てるために馬車まで行った。彼は、あらゆることがむちゃくちゃ辻褄が合っていないことをものすごく面白がっていた。自分の脚が新生活でぞくぞくしているのを感じながら歩んで行った。新生活のスリルと高揚感。しかも彼の胸中と喉には涙がこみ上げていた。なぜなのか？ なぜなのか？ 分からなかった。ただ死ぬまで大

声で泣きたかった。同時にオーストラリアの道を歩んでいた時、脚に非常な力と新たな生命力が沸き起こるのを感じたので、一種の高揚感に満ちて頭をぐいと反らせた。

高揚感が満ちるままにさせておこう。涙は蒸発させてしまおう。

馬車がそばに来た時、彼の眼には昔の危険な表情が出てきた。反抗的な態度と若いライオンの持つ猫に似た表情が。彼は馬車には乗らず、丘の上まで歩いて行った。険しいダーリング・レインジャーズを登っていた。すると間もなく素晴らしい光景が開けてきた。未開のままに非常に大きくて柔らかくて古めかし、清潔で新しい国が眼下に広がっていた。そして彼方には見知らぬ何もない海が輝いていた。未知の海まで蛇行している青い河がリボンのように巻いている灰緑色のブッシュが見えた。そして彼の心は、欲しいものを手に入れるんだと決心していた。何を欲しがっているのかを自分でも分かっていたけれど、彼はそれを得るのだという決心を心の中にしっかりと留めた。この古めかしい未開の国からそれを得ることを。

彼は丘の頂上で待っていた。馬がパカパカと上がってきた。朝は暖かく、太陽光が溢れていた。馬車の垂れ布は巻かれていて、ジョージさんの笑顔とエリスさんの紫色の顔と、子供の綿状の髪の後頭部が見えた。

ジャックは再び馬車に乗り込み、席に座った。リボンのように巻いておりところどころ耕地がある河谷を、馬は、ふもとに

灰色のブッシュのある丘まで息を切って進んで行った。全てがはかなく繊細でもやがかかった輝きをしていた。

「約束の地だ！ 約束の地だ！」

と、ジョージさんが叫んだ。

「私が若かった時、この土地の二七〇〇エーカー分に一〇八〇ポンドの値を付けたんだ。しかしハマーズレイは更に二〇ポンド高い値を付けたので、彼が手に入れたんだ。——ジャック・グラント、土地を手に入れなさい、土地を手に入れなさい。土地を買いなさい。請いなさい。借りなさい。盗みなさい。何と少しでも手に入れなさい。」

「彼が土地を手に入れるためにはもつと戻らなくてはならぬ。ここで眼にするものは何も手にできない。」

エリスさんが青い顔をして言った。

「彼がここに定住するとしても、高飛びできるさ。——法律はいつでも曲げられるし破られる。曲げられるし破られる。」

「ジョージさん、彼は私と一緒に住むつもりなのだから、土地をかつばらうなんてことに彼の注意を向けなくてくれないか。」と、エリスさんは言った。そして二人は土地条例、譲渡財産、借地、所有権主張などといった事柄について議論を始めたので、ジャックは間もなく聞き飽きた。彼は土地が美しいと思っていた。しかし土地を幾分かでも所有したいとは思わなかった。土地を「所有する」ということの可能性を全然感じなかったのがあった。そこに永遠に土地は存在していた。いかにして彼がそ

れを所有できるのか。——とにかく、このような点に関しては、それは彼には訴えかけなかった。

しかしエリス氏は「木材」がすごく気に入っていて、次のように言って、ジャックがかかっていた魔法を打ち破った。

「ジャック、これらの木々を見てごらん？ マホガニーゴムの木だよ。丘がブラックウッドリヴァーまで連なっている。何百マイルも延びている丘には、美しいマホガニーゴムの木が茂っているんだよ。不毛な鉄鉱石構造の木々だ。」

「囚人達が道路を建設中に住む泥粘土のバラックがあった。」と、馱者が言った。

「囚人の一人が逃亡したんだ。たいていは、逃亡すればブッシュに阻まれた。しかしこの囚人はそうじゃなかった。奴はまださまよっているとみんなは言う。だけどわしは、奴はもう死んだと思うね。」

ジョージさんは風景の説明をしていた。

「あそこが——ダーリングトンだよ。ダーリング知事はあそこへ行ったが二度と戻ってこなかった。故郷へ戻るのには一番の近道だ。——ボヤというのは岩を意味する原住民の言葉だ。」

——ちょうどあそこにマホガニークリークがある。あそこから我々の姿が見えるだろう。小僧たちは坂道から見ているんだ。駆け戻って行って大声で知らせるんだ。おとうは雄鶏を捕まえる。原住民の女は火を焚く。かかあは小麦をかき回す。下男はジャガイモを剥く——我々が到着したら夕食だよ。」

「そしてサムはビールの醸造がうまい。彼以上にうまい者はいないよ。寂しそうな場所だが彼には仲間がいるんだよ。」

「どうしてですか？」

「それはだね、誰もが彼の細君のハルモニウムを聴きに何マイルも離れた所からやって来るからだ。イギリスからその楽器を持って来たんだ。それを聴けば心が潰れる思いをする。過去の声だ！ グラントさん、あんたはイギリスから来たばかりだからきつとそれが大好きになるだろう。」

「そうだろうと思います。」

と、ジャックはコンサートのことを思い出しながら言った。

マホガニークリークでの夕食は、ジョージさんが言った通りであった。その後再びブッシュを通して進んだ。

午後の終わり頃に馬車は小さな脇道で止まった。そこには背が高い若者が、脚を伸ばして柳細工製の馬車にもたれかかっていた。

「やあー！」

と言って、グレイは馬を道の端へ連れて行った。井戸から水を汲み上げようと急いだ。

「着いたよー！」

と、エリスさんが馬車の背後から言い、背の高い若者は大きな赤い両手に絹綿色の髪をした赤子を受け取った。太ったエリスさんは馬車から降りた。若者は、ジャックの鞆や荷物を降ろし始めた。それでジャックも急いで手伝った。

「これがトムだ。」

と、エリスさんが言った。

「よろしく。」

と、トムは大きな手を差し出してジャックの手を瞬強く握った。それからみんなは柳細工の馬車の上に荷物を積みに行った。

「たくさんあるな。」

と、エリスさんが叫んだ。

「さようなら、ジャックー！」

と、ジョージさんは馬車の中から灰色の頭を出して言った。

「おとなしくしていなさい。そうすれば幸せになれるよ。」

この言葉にジャックは黙ったまま困惑していた。絹綿髪の女の赤子が彼のズボンをつかんでいた。

「あんたがエリス一家の子だとは全然知らなかったよ。」

と、彼は赤子に言った。

「そう、彼女はエリス家の一人なんだ。」

馬車が去って行こうとしていた。ジャックはぎこちなく近づいて、馭者にニシリング硬貨を一枚渡した。

「それはポケットにしまっておきなよ。わしよりもおまえさんの方が必要だろうからさ。」

と、グレイはくだけた感じで言った。

「おまえさんに最上の幸福が来ることを心から願っているよ。」
彼等全員が馬車に乗り込んだ。ジャックは馬に背を向けて座

り、赤子は彼のそばに紐で結ばれた。小さな彼の荷物は隅にま
とめておかれた。完全な沈黙の中で、彼等は、静かに微動だに
もせず立っているゴムの木々の間を進んで行った。ジャックは
このような沈黙を今まで感じたことがなかった。ついに馬車が
止まった。トムが飛び下りて柵の横棒を引いた。それで彼等は
柵を通り過ぎた。柵の中には、まだブッシュが生えているにも
かかわらず多くの羊がいた。トムがまた馬車に乗り込んで、み
んなは時折羊に出会いながらブッシュを進んだ。それからトム
が再び降りた——ジャックはなぜなのか分からなかった。若者
は荷馬車から斧を取り出して切り始めた。一本の木が道の邪魔
をしていたのだった。彼は折れた所を切っていた。甘い香りが
立ちこめた。

「キイチゴが邪魔をしている。アカシア・アクミナータだ。垣
根や柱や管や杖を製造するのに役立つ美しい木だ——だが何百
万エーカーもの木々が焼き払われてしまった。」

と、エリスさんが言った。

トムは幹を脇へ引つ張った。そして再び馬車を駆り、もう一
つの門まで来た。すると目の前のブッシュのなかに広い空き地が
あった。そして空き地の真ん中に平板で建てられた「けばけば
しい」家があった。板葺き屋根が低くペランダまで下がってい
た。黒い手織りの服を着たエプロン姿で日除け帽子をかむった
女性と、モールスキンと青いシャツを着たあごヒゲを生やした
若い男性が、元気のよい声で叫んで出て来た。

「中へ入ってお茶を飲んで下さい。僕が馬の交換をします。」
と、若いヒゲを貯えた男が言った。

若い女が赤子の結んであった紐を解いて、抱いて降ろした。
家の正面にはドアがあり、どの壁面にも窓が付いていた。だ
が彼等は全員が軒をくぐって、泥レンガでできた裏の台所まで
行った。そしてお茶を飲んだ。その女性はほとんど喋らなかつ
た。しかし微笑みながらお茶を回して赤子をあやしていた。若
いヒゲを貯えた男が入ってきたとき、微笑んで言った。

「エリスさん、馬車から郵便を受け取ったよ。」

「いいとも。」

と、エリスさんが答えた。

その後は誰も喋らなかった。

彼等が再び出発した時、柱の両側に見事な一対の葦毛の馬が
いた。

「ビルとリルだよ。私が作った品種だ。アンガスが二〇マイ
ルの道を横切らなければならぬ間貸してくれたんだ。馬を交
換したんだ。もう二〇マイル行かなければならぬんだ。」

今や雨が降り始めていた。そして徐々に暗くなり寒くなつて
きた。ブッシュは陰うつな感じであった。ジャックがこれまで
に知っているものうちでもっとも陰うつであった。上掛けと
雨がっぱが取り出され、赤子が濡れている所から移されてしつ
かりと隅に布でくるまれて置かれた。そして馬たちは着実な足
取りで進んで行った。そして大自然がねぐらに着いた時、エリ

スさんは眼を覚ましてパイプを取り出し、話し始めた。

「母さんは元気かい？」

「元気です！」

「グラントは？」

「同様です。」

「みんな元気かい？」

「はい。」

『彼は二〇マイル来た。そして彼だけが今質問する！』

と、ジャックは思った。

「パパ、町で医者に見てもらおう？」

と、トムが訊ねた。

「もう見てもらったよ。」

「なんて言われたんだい？」

「うん。ラケットが言っていたように心臓が悪いそうだ。だけど彼よりも長生きできるかもしれない。だから大丈夫だよ、お前。」

「パパ、それじゃ全く問題ないんだね。」

それからエリスさんは、あたかも死にもぐるいで話題を変えようとしているかのように、パイプを一生懸命引っ張った。

「ジャージー牛は子供を産んだ？」

「うん。」

「今度も雄なの？」

「いや、雌だ。美しい。」

二人共が黙って微笑んだ。それからトムの舌が突然弛んだ。

「彼女は可愛い美人だ。そしてあのバークシャー牛は九匹の可愛い入賞者を産んだ。わしは双児のオグとマゴグを小屋に入れた。あの黒い雌のスパニエルは、最近生まれた小豚を悩ましたので、殺さなければならなかった。なぜ奴が小豚を虐めるようになったのか分からないんだが。下の牧場を鋤き返しておいたよ。あんたが何をしたら良いかを言いに来てくれたんでありがたい。」

「ロング・マイル・パドックの耕作地はどんな具合だい？」

「一度そこへ行っただけだ。サムに全部まかせてあるよ。」

「ガムトリーガリー耕作地について何か聞いているかい？」

「スペンサーから伝言があった。できるだけ早くそこへ行っただほうがいいよ。」

「うん、今年はその土地を干拓してもらいたいな。トム、どうなるか分からないんだ。トム、お前にそこへ行ってもらいたいね。女たちが戻ってきたら、チビたちはここへ残しておけるさ。」

「彼はどんな男かな？」

「かなり若い男にみえるよ。ジョージ爺さんが彼のことを良く言っていたっけ。」

「ちよつとばかり紳士（トフ）だって。」

「頭がトッファイ（菓子）という意味がある）でなければ気にするな。」

「何か知っているの？」

「いや、知らないな。」

「ちよつと頭がおかしい。」

「いや、知らない。自分で見て決める。」

沈黙。

ジャックはこの話を全部聞いてしまった。だが、聞かなかつたとしても、簡単に想像できたであろう。

「そうさ。自分で決めたらいい。」

と、彼は毛布にくるまり馬のパカパカという足音を聞きながら、雨のしぶきを受けながら思った。疲労と無関心さで目くらみかしていた。ときどき馬は暗闇の中でゆっくり一生懸命に引いた。ときどきは滑るように進んだ。彼には何も見えなかった。ときどき馬具のがちやがちやという音と鼻あらしが混じった。そして車輪はうつろに響いた。『何か橋のような所を走っているんだ。』と彼は思った。そして、いかにして真つ暗闇の中で道が分かるのだろうか、と思っていた。ランプはなかったし木々はびしょ濡れで重かった。

それから終わりが来て、トムは飛び下りて門を開けた。希望！だが更に進み続けた。停止——希望——もう一つの門。更に先へ先へ。また同じだ。そして果てしなかった。

ついに直感が家に着いたということを知らせた。——雨は止んでいた。月が出ていた。ブッシュの大きな幹が骸骨のように伸び広がっており、死者のようで気味が悪かった。開けた場所があり、犬が吠えた。馬が近くで嘶いた。もう木々は見えず、

一群の動物が暗がりでも動いていた。そして灯が点つていない黒い家が目前に浮かび上がった。馬車は進み続けて裏手へ回った。戸が開いて、ろうそくの灯と炉端の灯を浴びて一人の女性の姿が浮かんだ。

「元気だよ、母ちゃん。」

と、トムが声をかけた。

「元気さ！」

と、エリスさんも言った。

「元気だよ。」

エリス奥さんが答えた。

さて、台所に全員が揃った。エリス奥さんは眼に疲れた表情が表れている茶色の髪をした女性であった。彼女は、ジャックの手を片手でつかんで、長い間じつと彼を見つめた。もう一方の手は、彼の濡れたコートに触れていた。

「濡れたね。夕飯を食べたら寝るといいよ。元気になると思うよ。トムがあんたの世話をしてくれるだろう。」

彼女は、彼がただ幸運をもたらすことだけを期待していた。彼女はこれら全身母親であった。先ず最初に自分の子供たちの母親であった。彼に対しては優しい思いを抱いた。だが彼は別の女性の子供であった。

みんなが夕食を済ませてしまつてから、トムは、庭を横切つて、新参者を家の外の暗闇の中へ連れて行き、戸をサツと開き、瓶の首に差しあつたらうそくに灯をつけた。ジャックは泥の

床を、窓のない窓を、裏打ちのない木の壁を、まだら模様天井を見回した。そして嬉しかった。みんながそう呼んでいたこの「隠れ家」を、彼はエリス家の子供たちと共有するはずであった。彼の脚車輪付きベッドは新しく清潔であった。彼は満足であった。清々しくて粗っぽくて隔絶感があった。

鞆を開いて寝巻きを取り出した時、服をどこに置いたら良いのかとトムに訊いた。戸棚もタンスも、他の何もなかったからである。

「背中に掛けるかベッドの下に置いてくれ。それでいやなら古い箱を見つけてやるよ——」

「ここでは生き方が素朴なんだ。マントルピースの飾りもないし蝶ネクタイを付けたハイカラ紳士もない。はでなやさ男は必要じゃないんだ。」

「僕は、はでなやさ男じゃないよ。故郷にいるそういう奴らにはうんざりだ。僕は荒っぽすぎて、やさ男振りが足りないことが問題なんだ。」

と、ジャックは言った。

「あんたはげんこが必要なのか？」

「やってみるか？」

ジャックは構えた。

「お願いだから止めてくれないか。」

「あなたの願いを叶えてやらないと。」

と、ジャックはベッドへ転がり込みながら言った。

「こっちへ！ ベッドから降りて祈らなきゃ。祈りを忘れて直ぐ寝るなんて、弟たちに悪い影響を与えるからな。」

と、トムが鋭く言った。

ジャックは若者を見つめた。

「あんたは祈ったかい？」

と、訊ねた。

「俺も祈るさ。おじいちゃんは、俺が祈らないときつく叱るんだ。この隠れ家で寝る誰でもそうしなきゃ。祈らないといけないんだ。」

「分かったよ！」

ジャックは簡潔に答えた。そして従順に起き上がって泥の床にひざまずき、早口で祈った。心のどこかで彼はトムの素朴な正直さに感動していた。またどこかで彼の粗野ないじめに、ゆっくりと蔑みの反発が生じて身をよじった。

だが再び、自身の、軽蔑に根付いた生まれつきのあの無関心に助けられた。

また、トムが、粗野ではあるがナイーヴな善心を持っていることが分かったので、どの少年もが持っている自然な忍耐力に助けられた。

彼は、疲れてはいたが、詳細に早口で最後のアーメンまで祈りを唱えた。それから朝まで眠るために、そしてただ忘れるために、忘れるために、忘れるためにベッドへ転がり込んだ。彼は自らの絶対的な忘却力に身を預けた。

(続)